



幸せって？

福井県小学校長会

会長 井上 政夫



私の好きな話を紹介します。あるお家でのお話です。お姉さんが友達の家から、小さなケーキを一つおみやげにもらってきました。その家には、弟がいました。お母さんに言われて、二人でケーキを分けて食べました。食べ終わると、お父さんが出てきて聞きました。

「なぜ、二人で分けないといけないのかな？」お姉さんがまず答えました。「弟が、かわいそうだから・・・」弟も答えました。「今度ぼくがもらってきたとき、半分お姉さんにあげるから・・・」お父さんは、少し寂しそうな顔をしてこう話しました。「かわいそうだからあげるというのなら、喧嘩をしているときにはあげられない。お返しを期待してあげるというのは、欲張りです。お父さんやお母さんがあなたたちに願っているのは、一つのケーキを二人で食べた方がおいしいと思える子どもになってほしいと願っているんだよ。」

今、世の中は、自分さえよければとか、一人勝ちを望む声が大きくなっています。そのことが、本当の幸せに結びつくかどうかは分かりません。このお話に出てくる姉弟は、きっと幸せな気持ちで生きていくことができると思っています。

人間が、チンパンジーとの共通祖先から分かれて700万年たちますが、農耕牧畜を始めたのは12,000年前です。共通祖先と分かれて以降の年数全体から見れば、人間は99パーセント以上を狩猟採集で生活し

てきたこととなります。つい最近まで、人間は食物を探しながら食べていて、「生きることは食べること」という生き方をしてきたのです。

ところが、今は「どこに食べ物があるだろうか？」と頭を使わなくても、お金さえあれば何でも手に入られる時代になりました。仲間と力を合わせて狩りをする必要もなく、一人でコンビニへ行って好きな物を買って、それを電子レンジに入れてチーンすれば調理する必要もない。だから、ある意味人間は退化してきていると考えます。

前述の姉弟のように、食べ物を一緒の場で分かち合っただけで食べるということは、二人で時間を共有するという人間だからこそできる営みなのです。

私たち教員は、「主体的、対話的で深い学び」を目指して全力を傾けています。しかし、狩猟採集生活を行ってきた人間が、「生きることは食べること」という当たり前にやってきたことに戻る。人間が元々持っていた能力を復活させると考えれば、気持ちも楽になるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、會報108号の発行に対しましてご指導とご協力いただきました関係各位、並びにご尽力いただきました編集広報委員会の皆様に心から感謝申し上げます、挨拶といたします。

時流潮流

新規オープンした年縞博物館の世界力 奇跡の湖、水月湖が世界の歴史の中心に

福井県年縞博物館特別館長
福井県文化顧問
理化学研究所名誉相談役
ノンフィクション作家

山根 一 眞 (やまねかずま)



2018年9月15日、福井県年縞博物館が開館しました。開館式典は午前11時開始でしたが、直前までの雨がウソのように晴れ上がり、爽やかな気持ちで第1日目を迎えました。開館直後には秋篠宮殿下と同妃殿下が、さらに皇太子殿下も来館。また福井国体の開会式に参列された天皇皇后両陛下も水月湖の年縞をご覧になり、大きな関心を寄せられました。また、来館された国立科学博物館を初め日本を代表する博物館長からも高い評価をいただきました。



【博物館外観1】

私は、ノンフィクション作家として、ジャーナリストとして、また、福井県文化顧問として水月湖の年縞の取材・執筆を続け、教科書『中学国語2』（東京書籍）に「読書への招待・歴史の物差し—水月湖の年縞」が掲載されたことなどから、年縞博物館の特別館長を任じられました。取材者の立場から一転、当事者となったため責任は重大。しかし、開館から約3か月の12月には来館数2万人を突破するなど滑り出しは予想を上回り、少しホッとしています。

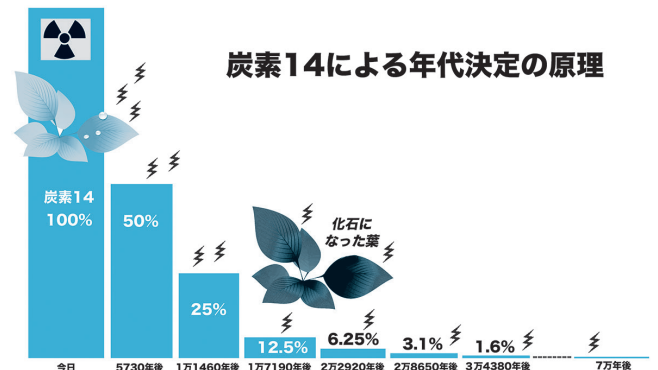
三方上中郡若狭町の景勝地、三方五湖のひとつ、三方湖に注ぐ鱒（はす）川の河口に面して、福井県里山里海湖研究所、三方青年の家があり「縄文ロマンパーク」を形作っています。三方五湖・道の駅のほか、鱒川に面して屋外ステージ（縄文コロセウム）もあります。この一角に年縞博物館と立命館大学古気候学研究センター福井研究所が加わり、自然、歴史や考古学を知り学ぶ充実した歴史科学公園となりました。

ところで、「年縞」と言っても多くの方が「それ何？」という顔をされます。この用語は2018年に出版された『広辞苑第7版』（岩波書店）で初めて掲載されましたが、「年縞」を何と読むのかに戸惑う方も少なくありません。「ねんこう」と読みます。鳥浜貝塚の調査の一環として行われた三方五湖で最大の水月湖（周

囲約10km）の湖底に、縞々が連続した泥の地層があることが発見されました。土砂などが堆積した1年分の縞の厚さはわずか0.7mm（平均）ですが、1年の欠けもなく7万年分、45mも続いていました。世界には年縞がある湖はいくつかありますが、1年の欠けもなく7万年分が続いている年縞は水月湖だけで、「奇跡の湖」と呼ばれるようになりました。2006年、現・立命館大学古気候学研究センター長、中川毅教授がリーダーの国際チームが水月湖の年縞の完全なボーリング掘削に成功、数年をかけてその全貌を明らかにしました。年縞には葉の化石が挟まっているため、それぞれの葉に含まれる放射性炭素（炭素14）の量を測る努力を続けた結果、水月湖の年縞は正確な年代決定の「世界標準のものさし」、IntCal（イントカル）に採用されたのです。

年縞による年代決定の仕組みは、以下のようなことです。

- 1) 水月湖の年縞は1年も途切れなく完全に連続しているため、最上部（追加ボーリングで2017年になっています）から古い時代へと縞の数を数え1年刻みの「年目盛」をつけることができました。
- 2) それぞれの目盛に対応して葉の化石から得た炭素14の値というもうひとつの目盛をつけた。
- 3) 世界のいすこかで出土した遺物の炭素14の値をまず測定する。
- 4) その炭素14の値が水月湖の年縞の1年刻みの縞の目盛のどの年に対応しているかを見る。
- 5) これで出土品の正確な年代が決定。



【炭素14による年代決定の原理】

作図：山根一眞

年代決定の世界標準 IntCal では、これまで1万3900年前までは樹木の年輪による「ものさし」が採用されています。それより古い時代の「ものさし」は中国やバハマ、ベネズエラなどの湖などの年縞が採用されていましたが、不正確さが問題でした。しかし、この部分に水月湖の年縞が採用され、1万3900年前から5万年前までの「ものさし」の信頼性が大きく向上、歴史学、考古学の出土品の年代決定が正確となりました。論文に「Lake Suigetsu」の名が必ず記載されるようになったのです(ちなみに炭素14による年代決定は5万年前までが限界で、より古い時代は別の方法がとられています)。

水月湖の年縞が「世界標準のものさし」に採用されたのは1万3900年前から5万年前までの3万6100年間とはいえ、現代から7万年前までの縞々には、その年の四季折々の環境を物語る花粉、プランクトンや珪藻の死骸、湖水から析出した鉱物、火山灰、黄砂などが含まれています。古代エジプト語解読のカギとなったプトレマイオス朝(約2200年前)の石碑「ロゼッタストーン」は私が好きな石碑で、レプリカを持っていますが、水月湖の年縞は、ロゼッタストーンが7万点も積み重なっているのと同じです。年縞を分析し、寒帯植物の花粉があれば、その時代は氷期だったことがわかります。というように、水月湖の年縞によって万年間にわたる古気候の変遷を知ることができるのです。立命館大学古気候学研究センターが併設されたのもそのためです。

7万年前は、私たち現生人類(ホモサピエンス)がアフリカから出て世界へと拡散していった「出アフリカ」の開始時に当たります。つまり、水月湖の年縞の7万年はホモサピエンスの歴史と一致。私たち人類がどのような環境の時代をたどってきたのかを知ることができるのです。水月湖の年縞の分析はまだごくわずかしか行われていませんので、今後、驚くべき成果が続々と出てくることを期待しています。

若い世代はスマホによって「何でもわかる」と思い込んでいますが、違います。情報のもとには現実のリアルな世界です。そのリアルな世界を「ホンモノの現物」によって伝えるのが博物館です。スマホ万能時代だからこそ、学びの場としての博物館の役割、重要性はより大きくなっています。年縞博物館は、そういう思いを込めて、45m、7万年分の年縞をスタンドグラスのように加工して展示。そのため、おそらく世界一細長い博物館になりました。また、わかりにくい年縞ゆえ、年縞博物館では来観者にいてねいに展示を説明するサービスも行っています(その説明担当の一人は地質学が専門の元、気山小学校校長の福田英則さんです)。ぜひ、生きた学習の場として活用していただきたいと願っています。



【博物館外観2】



【年縞ギャラリー】

ところで、水月湖の年縞を紹介する大きな記事が2018年12月3日の朝日新聞に掲載されましたが、「カリフォルニア大学のチームが中国の鍾乳石から炭素14の膨大なデータを得たため、これが世界標準となり水月湖の年縞が世界標準の座を奪われるのでは」と報じられ、びっくりしました。これは大きな誤報です。中国のデータは補正を必要とする信頼度が低いもので、水月湖が「世界標準のものさし」のコアであることに揺るぎがありませんので、ご安心ください。

写真図説明

- 1) 【博物館外観1】【博物館外観2】三方湖にそそぐ鱒川河口の年縞博物館(福井県若狭町鳥浜)。併設したカフェ「縞」も好評。
- 2) 【年縞ギャラリー】水月湖から得た7万年分、45mの年縞を展示した年縞ギャラリー。年縞を樹脂で硬化させ、薄片に研磨し、LED照明で縞々がくっきりと見えるように工夫した。
- 3) 【炭素14による年代決定の原理】大気中の炭素の中で1兆分の1だけ含まれる放射性同位体である炭素14の半減期は5730年。そこで炭素14を含む葉の化石や発掘遺物中の残存量を測定すれば年代を知ることができる。しかし、取り込んだ時の炭素14の量にはバラツキがあることが大きな問題だった。水月湖の年縞はそのバラツキによる不正確さを補正し、炭素14による年代決定の信頼度を著しく高めた。

退職校長の言葉

地域や学校の宝 子どもの笑顔を守りましょう

福井市湊小学校長
松本 行生

教師生活38年を終えようとしています。何もわからず、怖さも知らず、「自分は正しい、何でもできる」と部活動も含めてがむしゃらに活動を行っていた若い頃が懐かしくもあり、怖くもありますが、楽しかった日々を思い出しています。自分からみるとはじめは児童・生徒は宇宙人のようであり、しばらくすると我が子のように感じ、今では保護者が我が子、児童生徒は孫のような存在になってしまいました。自分の歴史、歩んだ長い道のりを思い出しています。

そして、ここ2、3年は怖さを知らされる現実直面、災害的な気候の恐怖を痛感させられました。台風・大雪・豪雨・猛暑と自分の身の回りにも起こりうる危機感をもっています。昨年台風21号では朝学校へ行こうと駐車場へ行くと、我が家の駐車場の車の上に隣の家の屋根が落下しているという衝撃な光景を見ました。そして、次の日の新聞のトップの写真となりました。昨年大雪でも恐怖を感じました。

福井市の校長会と市教委が連携して立ち上げた情報収集の場の校長会議室や緊急メールシステムは今まで以上に活用されていくと感じます。地域や関係機関との連携も今後ますます重要になってくると思います。ただこれからは、自然災害だけでなく、危機意識、危機に対する未然防止は校長の最優先課題になるのではと感じています。登下校中の交通事故や不審者対応も重要課題です。それだけではありません。子どもたちはみんな笑顔いっぱい学校生活を送っています。しかし、家に帰ると、一人一人それぞれ違う環境で全く違う生活を送っています。父母と家族4人で過ごす子、お母さんだけと生活する子、おばあちゃんと生活する子、大家族もあれば、親戚や友達の家で生活する子もいます。また、外国籍の保護者もいて、言葉や食事・文化、生活スタイルが多様化しています。しかし、学校ではみんな仲の良い友達です。仲間外しはしません、いじめの話も聞こえてきません。子どもたちの柔軟で広く温かい心に感謝をするとともに、優しさに敬意を表しています。我々大人も見習わなければいけないと感じます。一方で、勉強する意義を共有できない家庭もあります。長期休業中や連休に学校を離れ、家庭で生活することについて心配な子どもたちもいます。保護者とはコミュニケーションをとり信頼関係を築き、一緒に子どもたちを支え育てていかなければいけません。場合によっては、専門機関や医療機関との連携、助言、協力をいただかなければいけません。

子どもは地域や学校の宝です。

「Thank you for everything.」

福井市宝永小学校長
橋本 久代

病院の待合室でふと手にとった本。井上靖氏が自身の人生のことばとして『養之如春』を紹介されていた。『これを養う春のごとし』何ごとであれ、ものごとをなすには、春の陽光が植物を育てるようになすべきと言っている。「これ」には、何をあてはめてもよい。子どもを育てること、仕事を完成すること、病気を癒やすこと、あせらず、時間をかけてゆっくりと、春の光が植物を育てる、その育て方に学ぶべきなのである。」と彼は語る。

本校の校長室に入ると、掲げられた書に目が留まる。第14代校長川端太平氏が、著書「学校経営の理想と実際」の中で、「教育者として最大の資格は、絶えず向上し発展し進歩していく熱誠と努力である。」と語る。そして、後半で「我らの真の修養は、日常における児童との接触そのものである。」と。

教育者の子どもに生まれたわけでもなく、教師たるものの何かを知らないまま教員になった自分。38年経ち、教職を去る今、唯々、この2つの言葉が心にしみる。

学校には、子どもたちとの心のやりとりが溢れている。教師だからこそ得られる喜び。たとえ、それが何もわからない新任教師であったとしても、子どもたちとの日々のやりとりの中で教員であることの喜びに魅せられていく。私たちが集まると話題はいつも子どもたち。日々の子どもたちとのやりとりの中で私たちの心が涵養されていく。

ある退職間近の担任が小学校英語の研究授業に挑戦した。知っている単語を自己流で並べ、必死で英語を使い通す授業をした。授業の最後の感想で手をあげた児童が、感想を言う前に一言「日本語で言ってもいいですか。」と思わず言った。

circle (円) を初めて学んだときから、活動中ずっと「サーポー」「サーポー」と発音していた児童が単元の第7時目になった頃「先生、サーポーじゃなかった。サーコーだった。」とうれしそうに駆け寄ってきた。

遠足の弁当タイム、急いで敷物をしき終わると、自分は隅っこに座った児童が「先生の場所ここだよ。」と手招きしてくれた。

体育大会の応援で優勝した組の6年生団長が最後のあいさつで皆へのお礼の言葉を言い忘れた。それを悔やんで、翌日の昼の放送で「どうか言わせてください。」と願い出た。

たのしみは あさおきいでて 昨日まで

無かりし花の 咲ける見る時 (橘曙覧の歌)

仕事のよさを背中で伝える

大野市富田小学校長
馬道 保

父が教員をしていて、わたしはその影響を受けて教員になったように思う。小学生の頃は、よく父の勤務する高校へついて行き、そこで先生方にかわいがられ、よく遊んでもらった。

教員になって最初に勤務したところは学校ではなく、福井運動公園内にある児童会館だった。プラネタリウムの投影の仕事である。理科が専門で地学を専攻したからだろうか。しかし、自分だけが教員になれず悔しい思いをただけでなく、新採用研修でも話が合わなかったことがとても残念だったことを思い出す。しかし、お客の前で星の話をするのは、子どもの前で授業をすることと同じであることで納得できたし、みんなが知らない星座の名前や神話などを覚えていくことで自信をもつようになっていった。今でも、この3年間の経験は、理科教員としての自信になっているし、ためにもなっている。

教員になって熱中したのは、自分の専門である理科教育である。初めて指導案を書いたのは、3年の理科「じしゃく」の単元である。得意な分野なので、磁石の性質や磁石の歴史などを詳しく調べて書いた。しかし、学年主任の先生に、「指導案は、だらだらと書くものではない。」と注意された。自分としては、磁石について子どもたちが知って喜ぶだろうと思うことを書いたつもりだったが、3年生で学習する内容と違っていたので必要ないことを悟った。ちょっとばかり知っていることを書こうとした自分に対し、少し恥ずかしくなったのを思い出す。それ以来、理科だけでなく、算数や国語の指導案を書くことにも真剣に取り組むようになった。

「生まれ変わったら、また先生になりたいですか。」と聞かれたら、また、同じように教師の道を選ぶと答える自信はない。やりがいや充実感が今までのように感じられないからだ。管理職の立場がそう思わせるのか、それとも時代の流れなのかはよく分からない。現在の職場の職員は「良い職業を選んだ」と思っているのだろうか。本音を聞き出すことは難しいが、その表情や仕事ぶりから心の中を察するようにしている。

妻も教員で、両親が教員で育てられた我が子たちは、同じように教員には誰一人なってはいない。家庭で妻と交えて、学級であったことや部活動のことについて話すこともあり、その仕事ぶりが伝わっていたはずである。私が父を見て教員になったように、子どもたちには教員の良さを感じさせることができなかつたのかなと思う。

次は、職場の同僚に、校長のやりがいを感じさせなければと思いながら、職務に当たっている。

日本人学校での出会いから

坂井市立春江小学校長
出藏 直美

教師になって12年を経て、私はドイツ・フランクフルト日本人国際学校に赴任した。日本人学校は日本各地から推薦された派遣教員が集まるため、各県の些細な違いがもめ事の種になりやすく、フランクフルトでも運動会のやり方で延々と職員会議が紛糾したことがある。みんな地元のやり方に精通しているものだから一歩も引き下がらない。そんな中、強いリーダーシップで教職員をまとめていたのは、横浜から派遣された校長先生だった。理路整然と話し、かつ夢と情熱を熱く語る姿がとてつよよかった。また私は、フランクフルト在住の日本人を対象に英語使用の実態についてのアンケート調査を考えていた。ドイツ語圏にあって、国際語としての英語の必要性を実証し、日本でも小学校から英語教育を始めるべきだと論文にまとめたかったからだ。校長先生は私の研究のために独日協会に掛け合い、おかげで300人を超える協力者からアンケートが集まった。海外の一都市でそれだけのデータが集まったのは、校長先生のお力添えがあったからこそである。帰国して20年経った今でも、「自分がやりたいことをつらぬけ」と激励してくださる。英語教育と国際理解にずっと携わってきたのは、この校長先生の影響が大きい。

二度目にイタリア・ミラノ日本人学校に教頭として派遣されたときは、熊本出身の校長先生にお仕えした。県教委に勤務されていたこの校長先生とは学校運営について毎日のように話し合った。冷静な分析と中・長期的な展望で学校経営を語り、教育課程改善を断行されるのを間近で見させていただいた。中学部の休み時間を5分に短縮して授業時間を確保したり、新学習指導要領を先取りしたような「ダ・ヴィンチタイム」という裁量時間を作り、今でいう主体的・対話的で深い学びを掘り起こす時間を新設したりするなど、まさに先見の明があるこの校長先生を今でも尊敬している。

教育委員会がない海外では、文部科学省直々に報・連・相を行うため、学校運営を担う校長は一人で決めて全ての責任を負う。自分が校長になってからは、部下を信じて手をさしのべる校長、常に社会情勢に目を向け英断する校長、まさに遠く日本を離れて出会った二人の校長先生の姿をめざしてきた。私は、時々心の中で一人問う。「少しは先生方に追いつけているでしょうか？」

退職後は、今度は人生の師として、またお二人の背中を追い続けることになるだろうと思うこの頃である。

校長がかわれば学校が変わる

越前町立常磐小学校長
荒木 修司

「金八先生」「熱中時代」など世に教師物のドラマは数多くありますが、「校長」が主人公のドラマは数少ないと思います。私の知るところ「校長がかわれば学校が変わる」と「先に生まれただけの僕」ぐらいではないでしょうか。

そんな数少ない校長が主役のドラマですが、1998年に民放で放送された「校長がかわれば学校が変わる」(「久保田 武」氏作)は、特に印象に残っています。このドラマに先立つ1991年に「学校ペレストロイカ」が丸岡中から出版され、驚きをもって拝読した関係でドラマも興味深く観たからです。俳優の「加藤 剛」氏が演じた高校の校長が、彼の手腕により指導困難校であった高校を見事に再生するドラマでした。

当時、中学校で生徒指導主事として悪戦苦闘していた私は、「こんな経験をしてはみたいが、所詮は絵空事じゃないかな」と、半ば憧れ、半ば諦めの思いを抱いたものでした。

ところが、現任校に教頭として勤務していた時に、「校長がかわれば学校が変わる」ということを、目の当たりにすることになったのです。その校長は私の前任者であるY校長でした。前校長は、「授業改革」「校舎内の模様替え」「教員育成」と大胆な改革を次々と打ち出したのです。図書室から大量の書架や本を校舎内に移動して、校舎内のどこにいても本を読めるようにしたり、児童の絵や図工作品を校舎のいたるところに展示して校舎全体をギャラリー化したり、ほとんど休眠状態であった「一輪車」を出してきて、全校児童に乗車させたりと、よくそんなに思いつくなどと思うほどの様々な改革を一気に断行したのです。

中でも力を入れたのは「授業改革」でした。前校長は「とにかく考えるということを児童にさせ、思考力を高めさせたい」という思いが強く、「授業の中で考える場と時間を設定する」、いわゆる「学び合いのある授業」を展開することを目指していました。この授業改革の研究実践に学校一丸となって取り組むことにより、児童の思考力は確実に向上していったのです。全国学力学習状況調査の結果がそれを物語っています。教頭であった私は、前校長の考えに深く共感したこともあり、改革実現の一助となるよう誠心誠意努めさせていただきました。その後、私が現任校の校長となりましたが、前校長の思いを受け継ぎ発展させることに尽力してきました。学校が変わる現場に居合わせたことと、あの熱い思いを引き継いだことを誇りに思っています。

「校長がかわれば学校が変わる」、これは決して絵空事ではないのです。今まさに改革に臨んでいらっしゃる校長先生、これから改革しようと考えられている校長先生。心より応援しております。

anniversary

池田町立池田小学校長
山本 真由美

我が子が初めて自分の足で歩けるようになった日は、母親にとって決して忘れられない特別な日です。

同じように、教員にとっても、目の前の子どもが初めて「逆上がりができた」、「二重跳びが跳べた」、「九九が全部言えた」等々、日々いくつもの特別な日があります。今までいったいどのくらい特別な日に会ってきたことでしょうか。こんなにもたくさんの特別な日に立ち会うことができる教員とは、何て素敵な仕事なのでしょう。

しかし、残念ながら私は自分の子どもの特別な日、例えば入学式や運動会、学習発表会などにはめったに立ち会うことが叶いませんでした。母親として少し寂しく、我が子にも申し訳ない気持ちをいつももっていました。

そんな寂しい思いをしているので、クラスの子の特別な日のことは、必ずその子の連絡帳に書いて保護者に伝えていました。自分が親だったら嬉しいだろうなと思うことはほんの些細なことでも知らせました。時折連絡帳に返事が書いてあったり、手紙をいただいたり、いつのまにか悩み相談になっていたこともありました。子どもは親や先生が連絡帳に何やらたくさん書いていることが嬉しいのか、「早く読んで」と言わんばかりに、朝真っ先に見せに来ます。自分が大事にされていると感じていたのかも知れません。子どもや親との連絡帳でのやりとりは、どんなに忙しくても、ほんの一言になっても、どの子にも毎日続けました。

昨今の働き方改革の視点から、連絡帳への記入は多忙化の一つに挙がるでしょう。しかし、当時は意識していませんでしたが、保護者とのコミュニケーションや児童一人一人の個に応じた支援につながっていたのではないかと思います。何よりもその日その子の出来事を書くことは少しも苦でなく、逆に子どもの笑顔や保護者からの一言が自分自身の元気の源になっていたと思います。

ある日、卒業生の母親から手紙が届きました。「先日、次男に声をかけてくださりありがとうございます。次男は大学生活に自信をなくし実家に帰っていたのですが、先生と話をした元気に戻って来ました。」とありました。私は地区の体育会に来ていた彼と、「小学校では絵が好きで大きな賞をとったね。ドラムが最高に上手くなったよね。」と話しました。彼は自分の小さい頃の特別な日を思い出し自信を取り戻したそうです。彼との再会の日、二人にとってまた特別な日となりました。

管理職になってからも、一日一日が子どもたちの特別な日でした。それを、学校便りや教員・保護者との会話の中で伝えてきました。3月、いよいよ私にとって最も特別な日がやってきます。その日まで、子どもたちの大切な特別な日を、心を込めて伝えていきたいと思っています。

感謝!

敦賀市立成新小学校長
小澤 長裕

「おはようございます。」と、毎朝、元気に挨拶してくれる子どもたち。私は、一日のエネルギーをここからもらっています。もうしばらくで終わるのかと思うととても寂しく感じます。一方、周りの方から「一つひとつの行事が最後ですね。寂しいでしょう。」と声をかけられますが、教員生活が終わる実感がもてないのと、緊張感をもって教育活動に当たらなければならぬ現状もあり、そうした余韻に浸ることはできません。複雑な心境です。

先日、家の書棚を整理していたら、「昭和56年度新採用教員『教育実践の記録』」が出てきました。B5サイズで手書きの記録集です。分校で12名の子どもたちを担当したのですが、学級経営が上手いかず、多くの課題を抱え悩んでいる姿がそこにありました。そうした私の実践に、当時の嶺南教育事務所指導主事の先生が、寄り添うように励ますコメントをくださっていました。少し苦い思い出ですが、この子たちとは同窓会で楽しくお酒を飲み、昔話を楽しんでいます。ありがたいことです。また、このころに、人権教育を学び、算数や国語サークル、生活指導サークルなどで先輩の先生方と一緒に勉強させていただき、教員としての力量を高めようとがんばっていたことを昨日のことのように思い出します。私の教員としての原点がここにあるんだと思います。

新採用から35年間美浜町の小学校で、残りの3年間で敦賀市の小学校長として勤めさせていただきました。多くの子どもたちや保護者・地域の皆様、先生方と出会い、教育活動に取り組む中で、教員として人として成長させていただきまし、学校を支えていただきました。お世話になった皆様に感謝の思いでいっぱいです。

また、私は、これまで居住地区の自治会や子ども会、体協など一地域人としての自分を大事にしてきました。その中で様々な職種の方と出会い、共に活動する機会をいただきました。この地域の中で活動していたことや人とのつながりはとても大切で、私にとって大きな力となりました。とても感謝しています。今後も地域の中でお役に立てることを自分なりにやっていきたいと考えています。

38年間を振り返ると、いろんな方への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。最後に、教員生活を家庭で支えてくれた家族のみんなにも感謝したいと思います。ありがとう。

「816957」とともに

小浜市立西津小学校長
上野 秀枝

「816957」これは、昭和56年4月1日からずっと使い続けてきた職員番号である。38年間、私は、福井県の教職員の一人であることを証明してくれたこの番号に恥じない日々を過ごすことができたのだろうか。

採用されて初めて勤務したのは、高浜中学校。私を含め4人の新採用教諭とともに、県での辞令交付式のあと学校にあいさつに行った日のことは、今でもよく覚えている。ここから私の教員生活は始まった。

採用からの2年間は、副担任という立場だったので先輩の学級指導をたっぷりと学ばせてもらった。その後、1年生から3年生まで毎年クラス替えはあったが、担任として持ち上がり、初めての卒業生を出すことができた。卒業式の時は、妊娠8ヶ月の大きなお腹であったことも懐かしい思い出。今の時代だと響きを買いたいそうだが。その時、ある男子生徒が、教室で大きな声で言ってくれた「先生、3年間ありがとう」という言葉が今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。そんな彼ももう48才だ。私にとって、この5年間の経験は、教員の土台を構築できた大変意義深いものであった。

数年後に小学校へ異動になった。同期で小学校に採用された教員に追いつこうと先輩の授業や教室掲示を参考にしたりいろいろな本を買って読んだり、小学校教員としての指導力を高めようと必死だった記憶がある。

20代、30代は、本当に学びの多い期間である。ある人が、「教員の資質・能力は、35歳までに確立される」とよく話されていたが、そのとおりだと思う。この時期に自分自身がどのように取り組んだか、そしてどんな出会いがあったかが大きく影響してくると思う。今こうして自分自身を振り返ってみた時、がんばれる環境を作ってくださり、育ててくださった管理職や先輩の方々に感謝の気持ちで一杯だ。ここ数年、新採用の人数が増え、新卒者も多く採用されるようになった。私の勤務校にも毎年のように、キラキラと輝いた初々しい新採用がやってきた。今までの恩返しではないが、校長として彼らを次の勤務校に自信をもって送り出すためには、どのように育てていったらよいか、自分の中の大きなテーマの一つであった。

私が出会った新採用の先生方は、みんな素晴らしい原石の持ち主であったので、何もしなくてもしっかりと育っていったとは思いますが、「この初任の学校で成功体験を積ませたい」という思いで、「任せる・認める」ことを大切に接してきたつもりだ。少しは、力になれたらだろうか。今、大量退職時代のピークを迎え、次の世代へとバトンが渡されている。そのバトンが、うまくつながっていくことを願いながら「816957」と別れを告げる。

校 長 講 話

思いやりのある接し方

永平寺町上志比小学校長
前川 秀幸

今日は、友だちへの思いやりのある接し方（関わり方）について、みなさんと一緒に考えたいと思います。では、『思いやりのある行動』ってどんな行動かな？校長先生は、人が最初にできる『思いやりのある行動』とは、次のように、『声をかけてあげること』かなと思います。

- ①「〇〇ちゃん、あや跳びができてすごい！」などと相手の素晴らしいところをほめてあげること。
- ②「〇〇さんのおかげで、ふれあい班の活動がうまくいったよ。ありがとう。」などと相手に感謝すること。
- ③『〇〇さん、◇◇ができなくて困っているのかな？』『〇〇さん、手伝おうか？』などと相手のことを心配してあげたり、「〇〇さん、頑張れ！」と応援してあげたりすること。

誉め言葉や感謝の言葉、励ましの言葉は、言われると嬉しいし、勇気がわきますよね。上志比小学校が「ふわふわ言葉」が飛び交う学校であってほしいなと思います。

ところで、私たちの周りには、他のことは変わりなくできるのですが、「手足が不自由な人」「人の話がなかなか理解しにくい人」「自分の気持ちを伝えることが苦手な人」「じっとしていることが苦手な人」など、さまざまな人がいます。

「手足が不自由な人」は、つえをついたり、車いすに乗れば不自由さは少し軽くなりますね。

では、「人の話がなかなか理解しにくい人」「自分の気持ちを伝えるのが苦手な人」には、どうしてあげたらよいのでしょうか？

「人の話がなかなか理解しにくい（うまく話が伝わらない）人」には、①ゆっくりおだやかに、一つ一つ確認しながら短い言葉で、わかりやすく話す。②絵や写真などを使って、わかりやすく伝えてあげることが必要です。

また、「自分の気持ちを伝えることが苦手な人」には、笑顔で、相づちをうちながら、気持ちを聞いてあげることが大切です。

是非ともみなさんに、思いやりのある接し方ができるようになってほしいと思います。そうすれば、もっともっと楽しい学校になるのではないかと思います。

三つの鈴

勝山市荒土小学校長
道関 直哉

みなさん、あけましておめでとうございます。元気なみなさんと新しい年をスタートできることが、とても嬉しいです。今年の4月に6年生は中学生に、1年生から5年生までは全員が一つ進級することになります。1年間のまとめをしっかりと進級しましょう。

さて、今日は新年のスタートに当たり、校長先生が今年つくりたい学校がどんな学校なのかをお話します。この古代文字は何の字に分かりますか。2年生で勉強する漢字です。

この文字は持ち手のついた鈴の形からできました。白川静先生によれば、古代の人は鈴を鳴らして神様をよび楽しませたことから、鈴の形が楽しいことを表す「楽」という漢字になったそうです。

今年、作りたい荒土小学校はみんなが「楽しい学校」です。どうしたら楽しい学校生活を送ることができるでしょう。このためには3つの鈴をならすことが「楽しい学校」をつくるために大切です。

1つ目の鈴は「勉強の鈴」です。今までできなかった事ができるようになることや、分からなかったことが分かるようになることはとてもうれしいことです。先生方と一緒にしっかり学習し、元気に運動をしてたくさん「勉強の鈴」を鳴らしましょう。2つ目の鈴は「仲良しの鈴」です。友達と仲良く学校生活を送れることはとてもうれしいことです。どうしたら友達と仲良く過ごせるかを考え、実行していきましょう。自分の気持ちを大切にしながら、相手の気持ちも大切にしなければ「仲良しの鈴」は鳴らせません。この鈴は1つ目の「勉強の鈴」を鳴らすよりも難しいかもしれませんがみんなで努力しましょう。3つ目の鈴は「元気の鈴」です。今日みなさんは元気に登校できましたので、健康でいることは難しいことではないと思うかもしれませんが、しかし、事故や病気はどこに隠れているかはわかりません。規則正しい生活をして健康な生活を送りましょう。また、体の健康だけでなく心も健康でいることが大切です。歯を食いしばってがんばることも大切ですが、不安な事は遠慮せずに先生に相談して元気な生活を送りましょう。

今日から校長室の前にこの鈴を置いておきます。今、お話した3つのうち、一つでも良いことがあったときは、校長室の前を通るときにこの鈴を鳴らしてください。

「明るく 元気で 楽しい学校」にするために

鯖江市神明小学校長
加藤 健二

今日から平成30年度が始まります。皆さんは、それぞれ1学年ずつ進級しました。ここから皆さんの顔を見てみると、新しい学年でがんばろうという気持ちが伝わってきます。とても嬉しく、とても楽しみです。

さて、皆さんに今年1年、意識してがんばってほしい「3つの気」について話をします。

1つ目の気は「元気」です。早く寝て、早く起きて、しっかり朝ごはんを食べて、元気いっぱい学校に来てください。そして、明るく元気の挨拶ができる子、元気に発表ができる子、思い切り運動ができる子になってほしいと思います。

2つ目の気は「本気」です。何事にも本気で取り組むことで勉強や運動ができるようになります。わからないからやめたとか手をぬいて一生懸命やらないのではなく、自分の可能性を信じて、自分のもっている力を全部出し切って何事にも本気で挑戦してほしいと思います。

3つ目の気は「根気」です。根気とは、ねばり強く取り組むということです。何回も繰り返して取り組むことで、本当に分かったりできるようになるものです。ですから、あきらめずに何事にも根気強く取り組んでほしいと思います。

神明小学校の620人、みんなが「元気・本気・根気」の3つの気を身につけて、「明るく 元気で 楽しい学校」になることが、今年の目標です。そのために必要な大切なことを教えてくれるこの詩を、みんなで読んでみましょう。

「はきものをそろえる」

はきものをそろえると心もそろう
心がそろおう はきものもそろう
ぬぐどきに そろえておくと
はくどきに 心がみだれない
だれかが みだしておいたなら
だまって そろえておいてあげよう
そうすればきっと
世界中の人の心もそろうでしょう

(長野県円福寺 藤本幸邦住職の詩より)

はき物がそろっているということは、皆さんの心が落ち着いて、素晴らしいということです。心が落ち着いていると、勉強もしっかりできるし、友達とけんかもしないし、もちろん友達のいやがることもしない、そして、みんなが幸せな気持ちになるということです。神明小学校がすばらしい、みんなが楽しい学校かどうかは、トイレのスリッパを見ると分かります。「トイレのスリッパをそろえる」、みんなで行いましょう。

限界(壁)は自分でつくっている

美浜町立美浜西小学校長
高橋 一男

世界陸上400mハードルで銅メダルを2回獲得した為末選手の話聞く機会がありました。為末選手は、中学校・高校時代は短距離走の選手で、当時の100m、200mの日本中学記録やジュニア日本記録を更新するなど、国内敵無でした。為末選手自身、将来は世界大会でのメダル獲得を目標にしていました。

大学に進み短距離走を続けていたのですが、記録や成績は伸びず、スランプ状態が続いたそうです。そんな時、何気なく読んだ本に記録が伸びなかった原因が書かれていました。「体の成長の仕方は人によって違う」と書かれていました。為末選手は成長が早いタイプで、中・高時代は他の選手より体力面で勝っていたので、記録も飛び抜けてよかった。でも、大学時代には体の成長が止まり、記録も伸びなくなった。自分の体の成長と陸上の記録の伸びが繋がりに、それまで悩んでいたことがすべて理解できたそうです。

為末選手は、その後、短距離走から400mハードルに転向し、努力を重ね世界陸上の決勝レースに出るまでになりました。しかし、その決勝レースではゴール直前で転倒しメダルを獲得することができなかったのです。

為末選手はこのレース後、自分自身の精神面の弱さを克服するために、国内のレースに一切出ず、よりきびしい環境を求めて海外のレースにだけ参加したそうです。はじめの頃は外国の選手を見ると体も大きく圧倒されていました。何度も外国の選手と一緒にレースに参加しているうちに、レース直前に緊張で大きな体を震わせていたり、一緒に食事をしたときに食べ物の好き嫌いがあつたり、自分と同じようなところが見えてきて、外国の選手たちも強そうに見えるけど、弱いところもあって、自分と一緒にだとわかり、自分勝手に外国の選手にはかなわないという限界(壁)を作っていたことに気づいたのです。

それからは、周りの外国の選手に合わせて走ることをやめ、自分のペースで400mを走りきることに集中したそうです。自分は体が小さいがスタートダッシュが得意だ。外国の選手は体格もよく、レースの後半に追い上げてくる。外国の選手が追い上げてきても慌てずに自分のペースに集中して走り、その後、為末選手は世界陸上大会で2度も銅メダルを獲得しました。為末選手は言っています。「限界を自分で作ってしまった。最大の敵は自分自身だった。すべて自分の考え次第だ。」

みなさんは、それぞれ素晴らしい力をもっています。夢や希望に向かって、自分に限界(壁)を作らないで、挑戦し続けてください。

第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会報告

坂井市立長畝小学校長 勝木 雅美

1 期日・会場 平成30年10月4日～10月5日
函館アリーナ 他13分科会場

2 大会主題及び副主題

「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
～ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成
に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進～

3 第1日目の概要

(1) 開会式 大会長・実行委員長挨拶
祝辞(文部科学大臣 北海道知事 他)

(2) 文部科学省講話

別冊資料をもとに、文部科学省の教育施策の概要
について説明。(第3期教育振興基本計画について、
教員の働き方改革について、その他について)

(3) 全体会 本報告 大会主題・副主題・研究協議
会の趣旨説明 大会宣言に関する提案

(4) 分科会 全13分科会での研究協議

〈第6分科会(健やかな体)の概要〉

研究課題…健やかな体を育むカリキュラム・マネジ
メントと校長の在り方

視点① 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現
する教育活動の推進

発表「地域の特性を生かした健やかな体を育む教育
活動の推進と校長の果たす役割」

青森県階上町立小舟渡小学校 大手宏秀校長
三戸郡内の児童の体育授業や運動の実態から、学
校教育全体で運動を日常化した取組、体育の授業を
工夫改善した取組、家庭や地域と連携して多様な運
動に親しませる取組、地域の特性を生かして運動に
親しませる取組の4つの事例を挙げた。

その中において校長としては、職員・児童・保護
者に対するねらいや計画の周知、環境の整備、関係
者(団体)・保護者・地域との連携をすることが大
切な役割である。

視点② 生涯を通じて自他の健康課題に適切に対応
する教育活動の推進

発表「生涯を通じて自他の健康課題に適切に対応す
る教育活動の推進と校長の指導性」

北海道厚沢部町立鶉小学校 本谷弘之校長
体力・運動能力の向上を目指して、体育の授業は
もちろんのこと授業以外の取組を行うほか、新体力
テストの結果を分析して課題項目を体育の授業で補
う。生活習慣については保護者にも協力を得て生活
リズムの定着を図る。インターネットの利用に関す
る研修を行う。児童会で取り組む。健康教育の充実
のために、栄養教諭等の食育や養護教諭等の病気予

防を推進する。心の健康の面でもスクールカウンセ
ラーや養護教諭等との面談を実施する。そのような
たくさんの取組において、校長が明確で具体的な経
営ビジョンを示すことで、教職員の協働意識が高ま
り、学校全体で取り組むことにより成果が表れると
言える。

4 第2日目の概要

(1) 全体会 研究協議のまとめ 大会宣言

(2) シンポジウム

「ふるさと・挑戦・未来創造」

葛西紀明氏(スキージャンパー)

佐藤麻美氏(HTB編成局)

青田基氏(北海道PTA連合会顧問)

コーディネーター 針谷玲子氏(全連小調査研究部長)

葛西氏…幼少期は病弱で、父からはマラソンをやらさ
れたが、友達の誘いでスキージャンプを始めた。中三
で世界を目指すことを決めた。その後、スランプや所
属会社の倒産、家族のこと等いろいろな辛さを経験し
た。それでも母の支えや素晴らしいライバルの存在が
あったから挑戦できている。自分の夢は努力で叶える。
子どもたちには夢をもってほしい。

佐藤氏…幼い頃に母から教えられた食と先生との出会
いが今の自分の性格の基盤となっており、ふるさとの
重要なファクターである。小さい頃より何でもよくで
きていたが高3で人生初の挫折。それでもアナウンサー
になりたくて就職浪人して挑戦。最大限の努力をす
ることが大切だと感じた。これからは生きにくい時代
になる。だからこそ人と人のコミュニケーションを大
切にしてほしい。好奇心・創造力・想像力・向上心を
もって。

青田氏…先人たちが開拓し、足跡の残る北海道の地と
自分が育ってきた家庭、そして今の家族が自分のふる
さどである。パイロットを目指したが受験に失敗した。
家業を継いだが、今は教育支援事業を立ち上げている。
誰かがやらないといけないと思って挑戦を続けている。
子どもたちには自分のことは自分で決めることので
きる力、選択する力をつけてほしいと願っている。

(3) 閉会式 大会長・大会実行委員長 挨拶

次期開催地(秋田県)代表 挨拶

《所感》

分科会でのグループ協議では、地域によって環境や
児童の実態が大きく違うことを認識した上で、その実
態に合わせたいろいろな取組を知ることができた。ま
た、県外の校長先生と情報交換できたことは、今後の
学校経営にも活かしていきたい。校長として見識を広
める研修の大切さを再確認した。

人事行財政対策委員会

本委員会では、主に2つの活動を行った。1つは「県教育長と語る会」に向けて、各地区校長会から懸案事項、県教委への意見・要望等を集約し、懇談会の話題として取りまとめること。もう1つは、全連小三地区対策担当者連絡協議会において、各県の代表者と意見交換をすることであった。

1 県教育長と語る会 8/20(月)

県小中学校長会より12名、県教委より東村教育長をはじめ11名が出席した。次の2つの柱について、校長会より話題を提供し、学校の現状や課題等についてご理解をいただいた。

(1) 生き生きとした児童・生徒を育成するために

① 特別支援教育の現状について

- ・ 県内小中学校の特別支援学級は387学級と急増しており、特別支援学級の担任は、学級の児童はもとよりコーディネーターとして活躍し、学校にとって欠かせない存在となっていること。
- ・ 現在、各学校は特別支援学級の担任確保に苦慮しており、専門性のある教員の配置を望んでいること。

② 小学校英語の教科化について

- ・ 本年度より先行実施が始まり、各学校(地区)で試行錯誤しながら取り組んでいる様子。
- ・ 各校の中心となって研究を進められるリーダーの配置が必要であること。

(2) 活力ある学校、元気な教職員の育成に向けて

① 働き方改革について

- ・ 学校行事の精選、会議時間の短縮など、各校で業務改善に取り組んでいる様子。
- ・ 働き方改革の取組については、市町間で温度差が見られ、県教委の強いリーダーシップを望んでいること。

② 大量退職・大量採用期の学校経営について

- ・ 若手教員の資質向上やミドルリーダーの育成に向けて、各校で取り組んでいる様子。
- ・ 教職員の急激な若返りは、中堅・ベテラン教員の負担増に繋がってきていること。また、産休・育休の増加、新採用教員の異動などの短期間で教職員の入れ替わりは、学校経営の安定という面でも支障を来しつつあること。

2 全連小三地区対策担当者連絡協議会 10/23(火)

東海北陸・近畿地区(13府県)の代表者が出席し、①学校における働き方改革の進捗状況 ②外国語・外国語活動の取組状況(人的配置等)について、情報交換や意見交換を行った。

働き方改革については、各校や各県で成果を上げている事例等も紹介されたが、教員を増員しないと抜本的な解決にはならないという認識で一致していた。また、外国語・外国語活動においても、学習を効果的に行うためには、専門教員やALTの増員が必要との意見が多数を占めた。今後、全連小としても、国へ要望していくとのことであった。

(文責：福井市和田小学校長 野瀬 聡)

調査研究委員会

調査研究委員会では、『社会の変化に即応した安心・安全。安全な学校づくりと校長の役割Ⅱ』をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校経営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、昨年とほぼ同じ項目で調査研究を行った。

1 調査項目の設定

- ① 県民の信託に応える小学校教育の在り方や学校評価の在り方に関する課題
 - ② 全国学力・学習状況調査の結果公表及び各都道府県における学力調査の結果を生かした学力向上策や授業改善の取組に関する課題
 - ③ 教員の資質・能力の向上に関する課題
- (※④～⑩までの課題については報告書を参照。)

2 調査の結果

各学校では、学力向上や授業改善に向けた取組が行われている。また、教員の資質と能力の向上も、大きな課題となってきた。そんな中で校長がリーダーシップを発揮しながら、学校現場が抱える課題解決に必要な組織運営の工夫や実効性の高い取組を実施しようとしているが、いくつかの課題も浮き彫りになってきた。

授業研究や指導方法の改善を進めていく中で、校長が指導力を発揮しようとしている。つまり、学力向上や授業改善は全国のどの学校でも大きな課題であり、校長が強い意識をもって臨もうとしている。

特に、新たな教育改革・教育施策に対する関心が高く、安心して安全な学校生活を保障することに、喫緊の課題を感じている。英語や道德の教科化や、不審者侵入を防止する新しく古いこれらの課題に対する解決方法として、教員の配置、人的な措置や財政面でのバックアップの必要性を訴えているが、なかなか難しい状況にある。

同様に業務改善、多忙化解消において、社会の変化に即応した学校づくりのヒントは、学校が地域に理解を求め、自らの意識改革と、地域連携や保幼小連携、専門機関との連携を密にして、自分の学校以外の知恵や支援を得ながら、学校を活性化することである。

終わりに、アンケートの実施や集約などご協力いただいた県下小学校長をはじめ、調査研究委員の皆様々に心から感謝を申し上げる。

(文責：福井市春山小学校長 齊藤 洋二郎)

教育研究委員会

1 活動の報告

第70回福井県小学校長教育研究南越大会に向け、小学教育の在り方と校長の役割・指導性等について実践的な研究を推進した。大会では、全連小の研究主題「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育推進」のもと、副主題として「豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成」を掲げ、福井型8分科会において活発に研究討議を行った。

また、本大会の提案発表の中の2つの実践内容を、東海北陸三重大会において発表し、東陸各県の校長による研究議に生かすことができた。

2 主な活動内容

(1) 第1回教育研究委員会

期日：4月18日(水) 会場：県教育センター
 ○年間活動方針、年間事業計画について
 ○平成30年度各研究大会の概要について

(2) 第2回教育研究委員会

期日：6月7日(木) 会場：県教育センター
 ○第70回県小学校長教育研究南越大会について
 ○全連小北海道大会および東陸三重大会について

(3) 第70回福井県小学校長教育研究南越大会

期日：8月22日(水)
 会場：越前市文化センター・中央図書館
 武生勤労青少年ホーム・AW-Iスポーツアリーナ
 ○教育研究委員会より、駐車場係、受付係として運営に当たる。
 ○福井型8分科会に分かれて提案発表・研究協議を行う。(各分科会の提案者)

①学校経営	河野小	齋藤 為之	校長
②教育課程Ⅰ	沓見小	寺腰 聡	校長
③教育課程Ⅱ	豊小	窪田 光世	校長
④現職教育	清水北小	大崎ふみ代	校長
⑤危機管理	細呂木小	川端 新治	校長
⑥社会形成能力	内外海小	音頭 伸哉	校長
⑦自立と共生	長橋小	原 稔	校長
⑧連携・接続	乾側小	大塚 俊浩	校長

(4) 第70回全連小北海道大会参加(10月4日・5日)

○福井県より19名参加 提案発表はなし

(5) 第53回東陸三重大会参加(10月18日・19日)

○福井県より41名参加
 (提案発表)

第4分科会	沓見小	寺腰 聡	校長
第11分科会	内外海小	音頭 伸哉	校長

(6) 第3回教育研究委員会

期日：2月14日(木) 会場：県教育センター
 ○今年度の活動報告と次年度の計画等について
 (文責：越前市北日野小学校長 品川 満)

編集広報委員会

1 活動の基本方針

県小学校長会および各専門委員会の活動内容を「會報」に掲載し、全会員に知らせるとともに、平成30年度の県小学校長会の主な歩みを記録する。また、各界の先輩諸氏の提言などを受けて、校長としての指導力の向上や今日的課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役も果たすよう努める。

2 活動内容

(1) 「會報」の編集・発行(A4版、年2回発刊)

①第107号の主な内容

・巻頭言、知事講話、校長会に望む、
 県小学校長会の活動方針・内容専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負

②第108号の主な内容

・巻頭言、時流潮流、退職校長の言葉
 今朝の校長講話、各専門委員会の活動(4委員会)

③委員会活動

○第1回編集広報委員会(4/18 県教育センター)
 ・正副委員長選出・活動方針確認、年間計画
 ○第1回編集企画会議(8/2 県教育センター)
 ・正副委員長による第107号の最終校正
 ○第2回編集広報委員会(8/27 県教育センター)
 ・第107号の発刊・配付作業、振り返り
 ○第2回編集企画会議(1/8 県教育センター)
 ・正副委員長による第108号の最終校正
 ○第3回編集広報委員会(1/28 県教育センター)
 ・第108号の発刊・発送作業、振り返り

(2) 全連小広報担当者連絡協議会(7/3 東京)

「小学校時報」、「教育研究シリーズ」、「特色ある研究校便覧」などの活動計画・情報交換等

(3) 全連小編集「小学校時報」等の原稿依頼、原稿執筆

○「小学校時報」掲載

・5月号 高浜町和田小 岩崎かず代 校長
 ・7月号 国高小 真柄 秀一 校長
 ・10月号 美浜東小 木子 雅之 校長
 ・12月号 清水南小 山口 満 校長
 ・2月号 県教育総合研究所 牧野行治 所長

○全連小ホームページ「特色ある学校」

宝永小、花筐小、雄島小、志比小、敦賀北小

(4) 福井県小学校長会HP 掲載、更新(10月、2月) 會報、研究大会等

(5) 依頼原稿の調整(随時)

(6) その他必要な広報活動

(文責：福井市清明小学校長 大森 千恵)

編集後記

この度、『會報』第108号を発刊する運びとなりました。『會報』の発刊にあたりまして、福井県年稿博物館特別館長山根一真様にはお忙しい中、玉稿を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。また、会員の皆様からは経験に基づいた貴重な原稿をお寄せいただき、今号も充実した内容となりました。心より感謝申し上げます。昨年は50年ぶりの国体開催、そして、今年が平成最後の年であり新元号への改元の年になります。会員の皆様には、新たな時代を迎える中でより一層学校運営に力量を発揮されますことをご祈念いたします。今後も『會報』が校長として役割を果たすための一助となりましたら幸いです。